
Necessary Evil～必要悪～

草木原 蒼画

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Necessary Evil（必要悪）

【Nコード】

N9816D

【作者名】

草木原 蒼画

【あらすじ】

暈、八暈。これがユキの世界だった。”対魔”の力を持つが故に人々から必要とされ、同時に忌み嫌われていた少女、ユキ。彼女がカズヤという青年と出会った時、彼女の世界は変わり始めた。彼女がずっと願っていた叶わぬ夢を、叶えるために…………。

世界？

世界？

「破！！」

一人の少女の声と共に一筋の光が舞い降りた。

その光はただ一点を目掛けて降りそそいでいる。

「グジャアアアア」

光の中から呻き声が聞こえた。

しかし、少女は光を止めることはない。それどころか光はさらにその輝きを増していく。

光が増すに連れて呻き声も酷いものになっていく。

が、それと同時に呻き声はどんどん力無きものにもなっていく。

「滅！！」

少女の声が聞こえた。呻き声が消えた。

光が消えた。

辺りには静寂が訪れた。

畳、八畳。

これがユキの世界だった。

彼女はその身に持つ、強大な力故にここに閉じこめられている。

ユキがここから出ることが出来るのは、”魔”が出現したときだけだ。

”魔”を倒す力を持つものを人は対魔師と呼ぶ。

しかし、対魔師はその力故に人として認められずに、ただ”魔”を倒す道具として扱われている。

ここにいるユキも例外ではない。

対魔師の娘である、彼女は生まれた瞬間から、この八畳の世界で過ごししてきた。

最初は、母がいた。が、母はユキが4歳の時に死んだ。それ以降、ユキは一人でこの八畳の世界にいる。人々から必要とされながらも、忌み嫌われているのだ。しかし、そんなユキの生活にもここ最近、変化が現れた。ずっと、避けられてきたユキに初めて友達と呼べる存在が出来たのだ。

「昨日はお疲れ」

何もない八畳の世界にいたユキに声が掛かった。

その声は男性のものだが、ユキが唯一、毎日聞く声だった。

「別にあれくらい、いつものことよ」

この八畳の世界にある唯一の窓に行くとそこには、ユキの唯一の友達である、カズヤがいた。

ユキとカズヤが初めて出会ったのは3ヶ月前。

いきなり、カズヤが窓を叩いて来たのだ。

理由は知らない。ただ、それが出会いだった。

それから、カズヤは毎日、ここにやって来てはユキと話していた。

「で、カズヤの方はどう？」

「ああ、おかげでちゃんと手に入れてきたぜ」

カズヤは自慢げに笑うと胸ポケットから鍵を取り出してユキに見せた。

これはユキを閉じこめている、牢獄を開けるための鍵だった。

昨日、ユキがこの牢獄から出ている隙に合い鍵を作ったのだ。

「ねえ、早く開けてよ」

待ちきれなくなったユキはカズヤをせかした。

昨日、”魔”を殺した時からこの時を楽しみにしていた。

カズヤと一緒に町を歩いてみたかったのだ。

「ああ、ちよっと待ってろ」

「ふーん。気持ちいい」

澄み切った青い空を見ながらユキは背伸びをした。

こうやって、太陽が出ている内に牢獄から出たのは何年ぶりだろうか？

もしかしたら初めてかもしれない。

「それでは、何処に参りましょうか、お姫様」

「ええ」

今日、この時をユキはずっと夢見てきていた。

「どうだ。たのしかったか？」

「ええ。とっても」

太陽が沈んでしまってもユキとカズヤは世界を見ていた。

ユキにとって、牢獄から出た世界をこんなに落ち着いて見られたのは初めかもしれない。

しかし、そんな喜びも牢獄に戻って来た瞬間に消え去ってしまった。

「おい、いたぞ」

いつもなら、ユキの牢獄に人が近づくことはまずない。

人々はユキを忌み嫌い、また怖がっているから。

それなのに今日に限っては、人が来たみたいだ。

どうして、今日だったのだろうか？

どうして、なのだろう？

明日なら良かったのに。

明日ならどんな辛く酷いことを言われても耐えられたはずだ。

今日、カズヤと一緒に過ごした思い出があれば。

2人だけの秘密の思い出があれば。

なのにどうして、今日だったのだろうか？

あれから、ユキの脱獄がばれた翌日からユキはカズヤにあっけない。

ユキの牢獄の鍵は新しく代わったし、あの日から毎日、一度は必

ず誰かがユキのことを確かめに来る。

もう、ここから、誰かにばれずに抜け出すことは無理だろう。

仮に抜け出したとしても、誰も一緒には居てくれないのだろう。

大事な親友だったカズヤがユキの前から消えてもうすぐ二週間がたつ。

その間、ユキは一度もこの八畳の世界から出ていない。

ずっと、カズヤと過ごした、あの一日の記憶を思い返している。

初めて、他人と遊んだ唯一の思い出を。

「破!!」

光が舞い降りた。

その光は”魔”を食い尽くそうとしていた。

ユキは対魔師として、”魔”を葬り去っている。

唯一、ユキが他人に認められている時、唯一、ユキが八畳の世界から抜け出せる時でもある。

「滅!!」

ユキが叫ぶと”魔”は光に飲み込まれた。

”魔”が消え去るとユキはまた人々から不必要な存在として見られる。

この村で生まれた時から、代わることのない事である。

ユキはただ、”魔”を殺すだけだ良い。

ただ、それだけの存在なのだと、この村の全ての人々が思っている。

それは正しい事なのかもしれない。

”魔”に対する力は人が持つには危険すぎるからだ。

でも、ユキにはそれが正しいことだとは思えない。

「ほら」

扉を開けられユキはいつもの、八畳の世界に戻ってきた。

また、ここで一人だけの世界が始まる。

誰にも必要とされない、誰とも話せない、ユキ一人だけの世界が。
「おつかれ」

しかし、違った。

牢獄に入ったユキに話し掛ける声が聞こえた。

とても懐かく、もう一度聞きたいと願っていた声が聞こえた。

「カ、カズヤ！」

牢獄の中にいたのはカズヤだった。

一ヶ月前のあの日以降ユキの前から消えていたカズヤだった。

「帰りが遅いから中で待たせてもらったよ」

変わらなかった、一ヶ月のカズヤと今のカズヤは全く変わっていないかった。

「どうして？」

「え？」

「どうして、また会いに来てくれたの？」

もう、二度と会えないと思っていた。

もう、思い出の中でしかカズヤに会えないと思っていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「なんで、黙るの？」

カズヤは黙った。ユキはもっとカズヤと話したかった。

この一ヶ月話せなかった分、沢山話したかった。

「逃げよう」

ぽつりとカズヤは言った。

その言葉の意味がユキには分からなかった。

「逃げる？」

「そうだ。ここから、逃げるんだ」

一ヶ月間ずっと考えていた。

ユキがもっと普通に暮らすためにはどうすれば良いのか？

そして、たどり着いた答えがこれだった。

「で、でも、私は対魔師なの。ここから逃げるなんて許されない」
ユキにしても逃げたいと思ったことは一度や二度ではない。

でも、そのたびに対魔師としての使命が脳裏をよぎる。
そして、そのたびに気がつくのだ。

みんな、対魔師としての自分しか必要でないのだと。

「確かに、ユキは対魔師だ。

でも、それ以前にユキは女の子だろう。

こんな所にずっと居て良いわけがないんだよ」

私は女の子。

初めてだった、ユキは初めて女の子だと言われた。
人々はただ、対魔師としかユキを呼ばない。

ユキをただの対魔師としか見ていないから当然だ。

「女の子」

「そうだ。だから、こんな所にいなくても良いんだ。
もっと、世界を知っても良いんだよ」

許された。今まで、世界を知ることとは許されなかった。

そして、カズヤは対魔師としての自分を必要としていないことを
知った。

ユキを必要としているのだと分かった。

嬉しかった。ただ、嬉しかった。

「カズヤ、私もっと世界が知りたい」

その夜、カズヤとユキは脱獄した。

新たな世界を求めて。

何処？

何処？

「カズヤ、御飯出来たよ」

朝の日差しが舞い降りる中、ユキの透き通った声が響いた。
あれから、ユキとカズヤが脱獄してから、2人は別の町で生活していた。

だれも、ユキのことを対魔師と呼ばない町で。

「ああ」

そこは、ユキにとって幸せな場所だった。

カズヤと共に生活が出来、そして、女の子としての生活が出来ているから。

「今日はちゃんと焼いたよ」

掃除、洗濯、料理、それらのことが出来るから。

牢獄にいたときは何も出来なかった。

ただ、人々に必要とされるのを待っていた。

「ありがとうございます」

ユキは花屋でバイトをしている。

ユキのためにカズヤが見つけてくれたのだ。

「ユキちゃん、ちょっと手伝って」

「はい、サヤカさん」

そこではサヤカという友達も出来た。

同じ年頃の、同じ女の子の友達が。

無駄話をしたり、一緒に買い物に行ったりできる友達が。

嬉しかった。

脱獄して、カズヤと一緒に来て良かった。

ユキは今の自分が好きだった。

「ねえ、ねえユキちゃんとカズヤさんってどんな関係なの？」

「親友ですけど？」

午後のティータイム、サヤカはユキと一緒に紅茶を飲んでいる。

「本当にそれだけ？ 一つ屋根の下に暮らしてるでしょう」

「ええ」

この前、サヤカはユキの家に遊びに行った。

そこでカズヤと出会った。

そして、ユキとカズヤの関係が気になった。

「でも」

「でも？」

「私にとってカズヤはとても大事な人です。

彼がいないときと私は生きていきません」

カズヤと一緒に暮らすのがもはや当たり前だった。

一緒に御飯を食べたり、一緒に笑ったり。

牢獄に居たときは一人が当たり前だった。

そして、今はカズヤと一緒に居るのが当たり前だった。

「カズヤ、遅いな」

夕食を作り終えたユキはカズヤの帰りを待っていた。

カズヤも仕事をしている。ユキとは別々の仕事を。

それでも、いつもはユキと同じぐらいに帰ってくる。

でも、今日は違った。

待っても、待っても、帰ってこない。

一時間、そして、二時間が過ぎた。

「カズヤ、どうしたの」

もう、我慢出来なかった。

ユキはカズヤを捜しに出た。

「何処にいるの？」

心配のあまり外に出たものの、ユキはカズヤの居場所に検討が付かなかった。

何処で仕事をしてるのかさえも知らなかった。

”昔の友人を手伝っている”カズヤは仕事のことをそうとだけ言った。

「何処なの？」

町中をくまなく捜した。

何時間捜したのだろうか。

もう、分からない。

ただ、必死にカズヤを捜した。

でも、見つからない。町中何処を捜しても見つからなかった。

「カズヤ、何処」

その内、ユキは恐くなった。

また、一人になるのだと思うと恐くなった。

やっと、普通の女の子らしい生活を手に入れられたのだ。

恐かった。思えば思うほど恐怖は増していった。

また、あの牢獄、たった八畳の世界に戻る。

誰にも必要とされていない、対魔師としての生活に戻る。

嫌だった。この生活を失いたくなかった。

でも、見つからない。

カズヤが居なくなると戻るしかない。

あの、生活に。

見つからなかった。

明け方まで捜したけど、カズヤは見つからなかった。

ユキは部屋に戻ってきた。

カズヤと共に暮らした部屋に。

何でカズヤは帰って来なかったのだろうか？

やっぱり、私はカズヤにも必要とされていなかったのか。

そんな思いがユキの中に芽生えた。

ユキは慌ててそれを振り払った。
そんな事はない。

強く自分に言い聞かせた。
もう、疲れた。

目を覚ましたら、朝日が夕日に代わっていた。
夢を見た。

カズヤと共に暮らしている夢を。

楽しかった。出来ればさめないでほしかった。
せめて、夢の中だけでもカズヤと一緒に居たかった。
これからどうしよう？

「おはよう」

目の前にいた。

カズヤがいた。

「昨日は悪かったな。その様子だとずっと捜していたみたいだし」
「カズヤ？」

ユキは目の前のことを信じられなかった。

「仕事が長引いてな。隣町まで行ってた」

「良かった」

良かった。カズヤは私を見捨てていない。

分かった。私にとってカズヤがいかに大事なのが。

そして、はつきりと自分の思いも自覚できた。

「え？何か言った？」

「ううん。何も。」

それより、お帰り、カズヤ」

後、聞いたらカズヤは探偵の仕事を手伝っているらしい。

ユキもカズヤに頼んで何度が手伝いに行った。

楽しかった。カズヤと一緒に仕事をしているのが。

サヤカと一緒にするのは比べものにならない位に。

そんな日々はユキの想いを少しずつ、だが確実に抑えきれぬものにしていった。

女の子としての大事な想いを。

今日は花屋のバイトが休みだったため、ユキはカズヤの手伝いをした。

しかし、今日の仕事で”魔”が出てきた。

対魔師であるユキは”魔”を殺した。

自分の使命であるから、”魔”を殺した。

同時に、思い出した。

対魔師としてしか人々に見られていなかったあの日々を。

人々に忌み嫌われ、恐れられた日々を。

「ユキ、大丈夫か？」

カズヤにしてもユキの気持ちは分かった。

「ちょっと、大丈夫じゃない」

今は、女の子として暮らせている。

だけど、本当にこれで良いのか？

恐くなった。そして、その恐怖はすぐには消えそうもなかった。

「少し、休んでから帰るか」

ユキにカズヤの優しさがしみてきた。

カズヤは私を女の子として見てくれている。

だから、こんなにも気遣ってくれる。

改めて、ユキにとってカズヤがいかに掛け替えのないものなのかが分かった。

それは、もう親友以上に掛け替えのないものだった。

「あなたが好きなの」

もう、この想いを抑えることは出来なかった。

もう、耐えられなかった。

「え？俺のことを……」

「そう、私はあなたのことが好きなの」

ユキはカズヤから目を逸らさずにいる。

あの時、あの時からだ。ユキがカズヤを意識しだしたのは。

「あの時、カズヤは私に言ったよね。私は対魔師で”魔”を倒すのが使命なんだけどそれだけじゃないって、女の子だって言ってくれたよ。私ね、すごく嬉しかったの。今まで私は対魔師としか見られたことがなかったからすごく嬉しかったよ」

幸せそうだった。ただの女の子だった。ユキは普通の少女だった。

「あのことか」

「そう。私を女の子としてみてくれるのはあなただけだった。初めて私を女の子って言うてくれた」

それまでユキはずっと避けられてきた。いや、人々から嫌われ来た。

対魔の力は一步間違えば人も殺す。それ故にユキに近づくもの好きなどいなかった。

「カズヤ、あなたはどうかなの？私のこと好き？」

それともやっぱり・・・・・・・・・・怖い？」

聞かなかった方が良かったかもしれない。

聞かないで友達のままであれば良かったかもしれない。

でも、我慢できなかった。

このまま、カズヤとの関係を親友で終わらせるのは嫌だった。

「お願い、教えて」

ユキは待った。ただ、ひたすらにカズヤの答えを待った。

重い沈黙が流れた。

もはや、2人とも時間の感覚などなくなっていた。

「お、俺は・・・・・・・・・・」

走馬燈、カズヤは沈黙の中で昔の自分を思いだしていた。

孤独だった自分を。

ただ、使命だと思い、それを果たしてきた自分を。

「俺も、寂しかった。ユキと同じで寂しかった」

「カズヤ？」

「だから、俺もきつとユキと一緒になんだ。ユキは俺のこと恐いか？」
ユキは首を横に振った。

そんなことは一度もなかった。むしろ、その逆だった。

「だったら、俺も一緒だ。俺はお前を恐いとも思わないし。お前が好きだと思っている」

ユキは初めて泣いた。

初めて苦しみや辛さではなく、嬉しさから涙が出てきた。

「ありがとう、ありがとう、カズヤ」

それ以上、ユキは言うことが出来なかった。

それ以上は涙のせいで言葉が出なかった。

狩人？

狩人？

「”魔”が滅びた？」

「そうだ」

「でも、確かあの町には対魔師はいなかったはず」

「ああ、それなのに”魔”は滅びた。どうしてだと思う？」

「私たちの知らない対魔師がいると」

「もしくは、俺たちから逃げた対魔師かもしれない」

「逃げた？」

「あの町からすぐ近くの村で三ヶ月前に一人の対魔師が脱走した。もしかしたらそいつかもしれない」

「その対魔師、名前は？」

「ユキだ」

「ねえ、ユキちゃんって昔は何処に住んでいたの？」

仕事の合間にサヤカがユキに尋ねてきた。

「近くにある小さな村だけど、どうして？」

「あ、特に理由はないんだけど、人に聞かれたの？」

「聞かれた？」

「うん。その人、ユキちゃんのこと捜してるみたいだったよ」

昨日、店にいたサヤカは一人の女性に尋ねられた。

ユキと言う女を知らないかと？

「そ、その人、私のこと何って言ってた？」

ユキは一瞬、血の気が引けた。

もしかしたら、ばれたかもしれない。

ユキが対魔師であることがサヤカに。

そう思うと、サヤカの顔をまともに見ることが出来なかった。

「特に、何とも。あ、でも近くの村から来たはずだって、言ってたからユキちゃんに間違いないね」

とりあえずは一安心だった。

サヤカにはばれていないみたいだ。

もつともばれていたら、こんな風に話せていないだろう。

しかし、ユキを捜している人物は知っているのだろうか？

ユキが対魔師であることを。

「いたわ。三ヶ月前からここに現れた”ユキ”という人物が」

「そうか。接触は？」

「まだ。でも、居場所は分かったから近いうちには」

「野放しなのか？」

「殆どね。一応同居人はいるって話だけど、対魔師と一緒に暮らすなんてどんな物好きかしら」

「暴走する前には仕留めろよ」

「分かってるわ」

「誰かに追われてる？」

「サヤカさんが言ってた。女の人が私を捜してるって。」

ねえ、カズヤ、やっぱりその人は私が対魔師だから捜してるのかな？」

結局、ユキは対魔師としてしか見られてない。

みんな、対魔師としてユキしか必要としていないのだ。

だれも、普通の女の子としてのユキなど求めていないのだ。

「まだ、分からないが。その可能性は高いな」

きっとあの時、ユキが対魔の力を使ったから、ユキの存在がばれてしまったのだろう。

脱走してきたのだ。追っ手が来てもおかしくない。

「ねえ、カズヤ、私恐いよ。また、あそこに戻るなんて嫌だよ」

もう、ここでの生活しか考えられない。

ここで、カズヤと一緒に暮らしていくしか考えられない。

「大丈夫。護ってやるさ」

カズヤは優しくユキを抱きしめた。

暖かかった。確かにカズヤの温もりを感じる事が出来た。

「うん」

カズヤだけは信じる事が出来た。

何があってもカズヤだけは私を裏切らないと確信出来た。

夢を見ていた。

人々から忌み嫌われている夢を。みんなから恐れられている夢を。対魔の力は一步間違えば人をも殺す。

だから、みんな、私を避けた。私を人として見てくれなかった。ただ、対魔の道具としてしか見てくれなかった。

”魔”が出現すれば、私は必要とされる。けど、”魔”と倒すたびに人々は私の力を恐れていった。

みんなを殺すことも出来た。私にはそれだけの力はあった。でも、それだと何も変わらない。

また、別の人間が私を見る。人殺しの悪魔として。

恐かった。私は恐かった。

みんなが私をそんな目で見るのが。

私だって、人間だ。でも、だれも、私を人間としては見てくれなかった。

恐かった。辛かった。

私は悪魔でもないし、人殺しでもない。

なのに、みんな私をそんな風にしか見なかった。恐かった。哀しかった。

「また、あの夢」

昔の夢、私が人として認められていなかった時の夢。そんな夢をみた後だから恐くて眠れなかった。

「どうしよう」

ユキは一瞬迷ったが、迷いはその一瞬だけだった。布団から抜け出し、カズヤの元に向かった。

カズヤは最初から私を人として見てくれた。

一度も私のことを悪魔だの、人殺しなどとは言わなかった。

その上、私を女の子だとも言ってくれた。

嬉しかった。そんな風に言ってくれて嬉しかった。

カズヤだけは絶対に私を”悪魔”だの”人殺し”だのとは言わない。

絶対に、言わない。

「カズヤ？」

「そう、ユキちゃんはカズヤさんと付き合ってるの」

サヤカは女と話していた。

その女性はサヤカよりも年上で所謂、大人の女性だった。

「カズヤさんも優しくいい人なの。料理だって美味しいし後ね・

・あ、おい！ユキちゃん！」

ユキの姿を見つけたサヤカは手を振った。

「サヤカさん。おはようございます」

「おはよう、ユキちゃん。で、こちらがシズさん。この前言ってた、

ユキちゃんを捜してた人だよ」

サヤカに紹介されるとシズはユキに軽く頭を下げた。

ユキはこんな女性知らなかった。

「やっと、見つけましたよ。ユキさん」

シズはそう言って小さく笑った。

あれからシズは仕事が終わるころにもう一度来ると言って立ち去った。

ユキは出来ることなら、シズが戻ってくる前に逃げ出したかったが仕事場がばれたのだ、今日は逃げれても明日も逃げれるとは限ら

ない。

そう覚悟したユキはカズヤに事を知らせて、待った。
まだ、シズから追っている理由を聞いていない。

だから、もしかしたら。

そんな思いがあったのだが、事態はユキが予想した以上のことが
起きようとしていた。

「シズ？」

「うん。そう名乗ってたよ」

仕事ももうすぐ終わる。ユキとサヤカは閉店の準備をしていた。

そして、シズと名乗る女性より先にカズヤが来てくれたことでユ
キは少しは安心出来た。

カズヤがきつと私を護ってくれる。

「間違えないのか？」

「うん。カズヤ知ってるの？」

「俺の知ってるシズなら、その女性は”対魔師狩り”だ」

対魔師狩り、その名の通り、対魔師を狩る、つまり殺す者だ。

その強大な対魔の力をもつ対魔師を殺す。

それによって、強大な対魔の力が人を殺すのを防ごうとする者た
ちだ。

一度、対魔の力が暴走したら誰にも止められない。

対魔師が力尽きるその時まで、対魔の力は暴走し、”魔”を、そ
して、人を食い尽くす。

それを未然に防ぐために対魔師を殺すのだ。

「うそ。私、狩られてしまうの」

死、その言葉がユキの頭をよぎった。

死にたくなんてない。カズヤと一緒に生きていたい。

「いや、多分狩られはしないだろう。対魔師狩りは暴走する予兆の
ない者を狩ったりはしない」

対魔師は人から忌み嫌われ、恐れられてはいるが、人に取って必

要な者なのだ。

”魔”に対抗するために。

だから、対魔師狩りもむやみやたらに狩りをして、対魔師を殺しはしない。

危険な対魔師だけを狩るのだ。

「だったら、どうして来たの？」

「おそらく、暴走したために逃げ出したのだと思ったのだろう」
対魔師が自分の意志で脱走したなど夢にも思っていないだろう。

「それなら、事情を話せば・・・」

「それはどうかな。シズね・・・」

「おっ、電気消すよ」

ユキとカズヤの話はここで終わった。

サヤカが電気を消して、戸締まりを確認したらユキの今日の仕事は終わりだ。

「それじゃ、お疲れ」

「お疲れさま」

サヤカに別れの挨拶を済ませたユキはカズヤと共に人気のない裏通りに出た。

辺りは夕焼けのせいで真っ赤に見えた。

「待ってましたよ、ユキさん」

裏通りに出るとそこには、シズがいた。

「いろいろと聞きたいことがありますので一緒に食事でもどうです」
シズが何気なく接して来るのでユキは恐かった。

今までは避けられるのが恐かったけど、シズのこういった何気ない接し方も恐かった。

「大丈夫です。取って食べる訳ではないので。ご安心して」

従うしかない。ユキは恐怖のあまりそう思った。

そして、ユキが差し伸べられたシズの手を掴もうとしたとき、
「そういう脅し方は卑怯だ」

ユキはカズヤの声で金縛りがとけた。

やっぱり、カズヤは私を護ってくれる。
そう思った。

「カズヤ、やっぱり、あなただったのね」
カズヤを見たシズはどこか諦めにも似た声で言った。
シズはもしやと案じていたことが的中したことを知った。

サヤカと言う少女からその名前を聞いた時から嫌な胸騒ぎがあった。

でも、シズは必死にそれを否定した。そんなことは起こりうるはずがないから。

「久しぶりだね。シズ姉さん」

カズヤは覚悟を決めた。

ユキに、自分の過去が知られてしまうことを。

そして、その後どんなことが起ころうと自分はユキを護ると。

「カズヤ、あなたどういいうつもりよ!」

シズはいきなりカズヤに叫んだ。

こんな現実には信じたくなかった。

「この子是对魔師なのよ。分かってるんでしょ」

「ああ、分かってる」

「だったらどうして、彼女と付き合ってるのよ」

「そ、それは」

ユキが好きだから、そう言ってもシズは信じないだろう。

仮に、信じたとしてもカズヤの気持ちなど少しも理解出来ないだろう。

「カズヤ、あなた過去の事忘れたの?」

それを聞いてカズヤは何も言えなくなった。

忘れていた。過去の自分を忘れようとしていた。

それはユキには知られたくないことだから。

「対魔師は、人を殺すのよ。それはあなたが一番知っていることでしょう」

対魔師は”魔”を殺すだけではない。

人をも殺す。そう、あの力は人を殺す力でもあるのだ。

「それなのに、何であなたはこの子と一緒に笑ってられるのよ」

シズは怒っている。シズは悲しんでいる。カズヤにはそれがよく分かった。

小さい時から一緒に暮らしてきた姉弟だから、シズの気持ちはよく分かった。

「姉さん、俺は……」

自分の気持ちをシズに伝えたかった。

自分の想いを。

でもそれは出来なかった。それを言うとシズを裏切ることになるから。

「あなただって、対魔師が憎いんでしょう！」

そう、確かに対魔師が憎いと感じた時もあった。

人のために”魔”を殺しながらも、結局は自分の手で人を殺した対魔師に殺意を感じた時もあった。

でも、今は違う。

「昔はそう思ってた。でも、今は憎いとは思わない」

カズヤがそう言った瞬間、カズヤは自分の頬に哀しみを感じた。痛みとして。

何が起きたのはすぐ分かった。

シズは今まで見たことのない、哀しい眼差しでカズヤを見た。

「何言ってるのよ！対魔師は、対魔師は私たちの両親を殺したじゃないの！！」

10年前、対魔師が”魔”を殺そうとしたときにその対魔師は暴走してしまった。

”魔”をも殺す力は暴走した。

そして、全てを破壊した。

多くの命を、多くの人の未来を奪ったのだ。

「カ、カズヤ、それ、本当？」

それまで黙ってカズヤとシズを見ていたユキが口を開いた。

その顔は見るに見かねた顔だった。

カズヤに否定してほしがつている顔だった。

でも、カズヤは否定することが出来なかった。両親が対魔師に殺

された事実だから。

「ああ、本当だ」

それを聞いたユキは逃げ出した。

急いで、カズヤの前から逃げ出した。

必要？

必要？

「人殺し！！」

「悪魔！！」

みんな、違う。私はそんなのじゃない。

私は悪魔でも人殺しでもない。

私はユキだよ。

何で、誰も私をユキって呼んでくれないの？

私にはちゃんと”ユキ”って名前があるのになんで対魔師とか悪魔とか人殺しとしか呼んでくれないの？

ねえ、カズヤもやっぱり私のこと人殺しって呼ぶの？

そうだよ。私は対魔師だもんね。

カズヤの両親を殺したのと同じ対魔師だもんね。

人殺しって呼ばれてもしようがないよね。

だって、事実だもんね。

私は”人殺し”なんだよね。

対魔師なんだから、仕方ないよね。

「どうして、対魔師なんかと一緒にいるのよ」

シズの中にあるのは裏切られたという思いだけだった。

カズヤは分かってくれていると信じてた。

対魔師がいかに危険な存在であるかも私の気持ちも全部分かってくれていると信じてた。

だって、姉弟だから。

「黙ってないで何か言ってよ」

どうして、カズヤは私を裏切ったの。

対魔師は私たち姉弟がもっとも憎む存在じゃなかったの。

「間違っている。そう思ったんだ」

「間違ってる？ 何が間違ってるって言うのよ！ 対魔師はこの世でもっとも危険な存在でしょう」

この世で対魔師に対抗できる力はない。

だから、彼らが暴走すると誰にも止められないのだ。

「姉さんには、分らないよ」

その一言で拒絶された。

シズはそう感じた。唯一、分かり合えていると信じていた弟から拒絶されたのだと。

「そう、かもね。でも、あなたもあの対魔師とは一緒に入れないわよ」

「どうゆうことだ。姉さん」

「もう、この町の人間はみんな知ってるわよ。」

彼女が対魔師だということをね」

カズヤは走った。

急いでユキに追いつこうとした。

今、追いつかないと二度とユキに会えないと思ったから。

「カズヤ」

ユキは一人で町中を歩いていた。

日はもう沈み。辺りには光がともっている。

これから何処に行けばいいのだろう。

もう、あの部屋には帰れない。

カズヤのいるあの部屋にはもう二度と。

私は対魔師だから。

「そうよね、私は対魔師なのよね」

何で、カズヤは私に近づいたのだろうか。

やっぱり、カズヤもシズと一緒になんだろう。

考えてみれば当たり前だ。

対魔師に好んで近づくようなものはいない。そんな物好き存在す

るわけがないのだ。

きっとカズヤも私を狩るために近づいたのだ。
そうなんだ。

「帰ろう」

帰ろう。あの場所に、あの八畳の世界に。

この世であそこだけなんだ。

私がいることを許されている世界は、あそこしかないんだ。
だれにも必要とされていないあの場所しかないんだ。

『ほら、あの子、対魔師なんでしょう』

声が聞こえた。

その声にユキははっとした。確かに聞こえた。対魔師と言っていた。
た。

よく見てみれば人々はユキから離れている。

そう、みんなユキを避けていた。恐れていた。

そうか、みんな知ってしまったんだ。

そんな事実をユキは素直に受け入れられた。

これが当たり前なんだと分かっていた。

「くっそ！」

人混みの中カズヤは必死に走った。ユキを捜した。

シズの言っていたとおり、ユキが対魔師であることは既に町中に
広まっていた。

その噂を頼りにしていけばユキにたどり付けるだろう。

しかし、どうすればいいのだろう。

どうすれば、ユキを救えるのだろう。

「あの時からか」

カズヤとユキが初めて出会った時、カズヤはただ下見をしに
いただけだった。

そこにいる対魔師が暴走する危険があるかどうか調べるだけだっ
た。

しかし、それで見たのはただの女の子だった。

少しだけ話して見ると彼女は何も知らないただの女の子だった。

そして、夢を語ってくれた。

外の世界を見てみたいと。

シヨックだった。

自分には夢などなかった。

ただ、誰に頼まれたわけでもなく、対魔師狩りとして対魔師を狩ってきた。

それが使命だと思い。ただ、それだけをしてきた。

それなのに彼女は違った。

夢を持っていた。

そして、自分はその夢を叶えてやりたいと思った。

ユキの夢を。

人の視線が痛かった。

ユキをユキとして見ていない。ユキを対魔師、いや恐怖の対象でしか見ていないその目が痛かった。

『何で、対魔師がこの町に』

『どうやら、近くの村から逃げてきたらしいですよ』

『うそ、いつからここに』

『もう、三ヶ月も前からだよ』

『暴走、しないよね』

『そんなこと、あってたまるか！あんな奴に殺されたくねえよ』

人々が私の噂をしている。

みんな怖がってる。みんな怯えてる。

みんな私を必要としていない。みんな私を邪魔だと思ってる。

ここは、私の居場所じゃない。

早く、私の居場所に帰ろう。

ユキがそう思っていると一つの声が聞こえた。

『あの対魔師と一緒に暮らしていた。男がいるんですって、きっと』

対魔師におどされてたのね。可哀想な人』

カズヤのことだ。

カズヤは人だ。私と違う。私と違って、みんなと一緒にだからみんなから心配してもらえるんだ。

私は対魔師だから、カズヤとは一緒に入れない。

ふ、私、まだカズヤのこと想ってる。未練がましい女よね。って、私は女じゃないよね。対魔師に男も女もないもんね。

『あんな、対魔師、早く出てしまえば良いのに』

『そうよ。この町に対魔師なんていららないのよ』

『早く、出ていけよ!』

『誰も、あなたなんて必要としていないのよ』

分かってる。

分かってるよ。

だから、私はここから出ていくよ。

誰も私を必要としていないもんね。

見えた。

やっと思えた。

「ユキ!!」

気が付いたら叫んでいた。

みんなユキを避けていた。だから、すぐ見つけることが出来た。

「カズヤ？」

ユキが振り返った。

「何処に行くつもりだ」

「私は、帰るの。私のいるべき場所に」

「あの、牢獄にか」

「うん。私が許される世界はあそこしかないから。それとも、カズヤがここで私を殺す？」

カズヤは一瞬、我を忘れた。

「カズヤも本当は対魔師狩りなんでしょう」

対魔師狩り、その言葉に人々がざわめいた。

『彼が対魔師狩りなの』

『彼なら、あの対魔師を殺せるのよね』

『あんな、対魔師さっさと殺してしまえ!』

『そうよ、私たちみんなが死ぬ前に殺してよ』

人々のざわめきが聞こえた。きっとこの声はユキにも聞こえていくはずだ。

「ほら、みんなも言ってるよ。良いよ、殺しても」

ユキは両手を広げた。

死ぬ覚悟は出来ていた。

むしろ、殺されることを望んでいたのかもしれない。

『そうだ。殺してしまえ』

『殺せ!』

『対魔師なんて私たちには必要ないのよ』

『かつてに住み着いた対魔師が死んでも悲しむ奴なんていねえよ』

無意識の内にカズヤの手が懐に伸びた。

そこには、愛用のナイフがあった。

今まで、これで何人もの対魔師を殺してきた。

今だって、これまでと変わらない。

ただ、これを胸に突き刺せば良いだけだ。

「違う、絶対に違う!」

カズヤはナイフを投げ捨てた。

「カズヤ、何で?」

「俺は、お前を殺すためにお前と一緒に居たわけじゃない」

今まで、何度も対魔師を憎いと思ってきた。でも、ユキを憎いと思ったことは一度もなかった。

「でも、私は対魔師なんだよ。カズヤの両親を殺した対魔師と同じなんだよ」

私は対魔師。

”魔”を倒すのだけが使命。

ただ、それだけしか必要とされない存在。
そして、人を殺す危険のある存在。

『あら、聞きました奥様』

『ええ。やっぱり対魔師は人を殺すのね』

『ねえ、ママ、僕、あの悪魔に殺されちゃうの？』

『大丈夫よ。きつとあのお兄ちゃんが悪い悪魔を退治してくれるよ』
人々の勝手な声が聞こえる。

カズヤはその声を無視した。カズヤにはユキを狩る思いなど微塵もなかった。

「確かに、ユキは対魔師だ。

でも、それ以前に女の子だろう!!」

辺りの声が止んだ。

誰も何も言わなくなった。

「ユキは女の子だ。だから、もっと世界を知っていんだよ」

そんな中でカズヤの声だけが響いた。

「ユキの夢だろう、世界を知ることとは。

その夢、かなえて良いんだよ」

きつとあの晩、ユキの夢を聞かなければカズヤはユキを狩っていただろう。

世界を知りたい。たったそれだけだ。

カズヤたちなら夢に思うまでもない。

「たった、八畳の世界じゃなくて、もっと広い世界を見てみたかったんだよな。

今、見れてるじゃないか。それなのにどうして、またあそこに戻ろうとすんだよ」

八畳の世界から窓を通して、外の世界を見ているユキを憎いとは思えなかった。

対魔師と見ることが出来なかった。

「ユキは俺の両親を殺した対魔師でもなければ、悪魔でもないんだ」
ユキは黙ってカズヤの言葉を聞いていた。

そして、思い出していた。

カズヤのおかげで知ることの出来た世界を。

そこにはカズヤがいた。

サヤカがいた。

そして、ユキがいた。

「戻る必要なんてない。あそこに戻っても誰もユキを必要だとは思っていない」

カズヤと一緒に暮らした。

花屋でバイトをした。

サヤカと一緒にお茶を飲んだ。

カズヤを一晩中捜した。

カズヤに告白した。

初めて、嬉しくて泣いた。

「だから、ユキはここに居ていい」

戻りたくなくなった。

ユキはあの八畳の世界に戻りたくないと思った。でも、

「私は、対魔師、人はユキは必要としていない。でも、対魔師は必要とされている。だから、私はあそこに戻るべきなの」

今まで、生活は楽しかった。

いい思い出になった。

ユキとして、生きていられた時間はとても大事なものだ。

でも、それも今日までなんだ。

結局私は対魔師なんだ。

「ユキはユキだろう」

弾けた。

ユキの中で何かが確実に弾けた。

また、泣いた。泣きながらカズヤに抱きついた。

「うん、うん。そうだよ。私はユキだよ。私はユキなんだよ」

ユキとして認められた。そんな気がした。

対魔師であるよりも先にユキであることを必要とされた。

ずっと、ずっと願ってた。

対魔師じゃない。ユキを必要としてくれる人が現れるのを。

「逃げ出した対魔師を見失ったわ」

「何？」

「何処に逃げたのかは分からないわ」

「どうする？」

「接触した限りだと暴走の可能性はなかったわ。しばらくは無視しておいても大丈夫そうよ」

「そうか。シズがそう言うならそうだろうな。次の獲物が見つかったら教える」

「ええ。よろしく頼むわ」

シズは話を終えた。

そして、その先にいる弟を見た。

弟と一緒にいる対魔師を見た。

「対魔師である以前に女の子か。カズヤ、あなたの気持ちが分からないわ」

シズは後ろに振り向いて歩き出した。

あの2人にこれ以上関わらない方が2人のためだからだ。

「バイバイ。カズヤ、それに対魔師ユキさん」

「ふーん。気持ちのいい青空」

透き通った青空を見ながらユキは背伸びをした。

「本当に行っちゃうの？」

サヤカは残念そうに言った。

ユキの夢をさらに叶えるため、カズヤとユキは旅に出ることにしたのだ。

「ま、ユキの夢だしな」

ユキが対魔師であることは町中に広まった。

そして、人々はユキを忌み嫌った。

しかし、みんながユキを避けるようにはならなかった。
サヤカみたく、今まで通りユキと接しているものもいた。

”ユキはユキだろう”

カズヤのあの台詞に共感できた、対魔師でないユキを知っている
ものたちだ。

「少し、寂しくなっちゃうな」

「また、いつかここには帰ってくるよ」

「本当、約束だよ」

「ああ」

「カズヤ、乗り遅れるよ」

目の前に止まる船を見ながらユキは大はしゃぎだった。

もっと、もっと、いろんな世界がみれる。そう思うといても立っ
てもいられなくなってくる。

「それじゃ、お別れだな」

「ええ、お元気で」

「サヤカもな」

「はい。ユキちゃんもお元気で」

「うん。また一緒に紅茶飲もうね」

「今度は最高のお茶でまってるよ」

それから、数分後船は出航した。ユキとカズヤを乗せて。
畳八畳なんかではとても収まらない、世界を目指して。

END

必要？（後書き）

後書き

”この世界に、必要でない人はいない”

電車の中で、そんなフレーズを見た。

その時に個人的に思った感情がこの作品を書いた原動力です。

あの時感じた思いをそのまま物語にすることは出来なかったけど、「必要？」という事に少しでも思いをはせていただければのなら、幸いです。

この作品自体は、結構昔に書いていました。

昔、自分のホームページ開いていた頃から、掲載していた作品だから、かれこれ何年前になるのだろう。

自分の作品では、本当に珍しく短編として完結している物語。

同じく小説家になろうで連載させていただいております”ダイジェスト・プレイ・セブン”とか読んでいただけるとお分かりになると思いますが、基本的に書いていたらどんどん話を膨らませてしまう質なので。

この物語は、ネット上で、先に書きたいシーンを書いてから、その後で繋ぎのシーンを書いていく。

と言うのを知って試しに実戦してみた作品でもあります。

多分、先に終着点が出来上がっていたら、良くも悪くも予定通りの物語になったでしょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9816d/>

Necessary Evil～必要悪～

2010年10月8日15時34分発行